

# 日本スポーツ社会学会会報

# Sport sociology

第23号

## —— 目 次 ——

会長挨拶	1
第8回学会大会特集	1
理事会報告	16
研究委員会からのお知らせ	19
編集委員会からのお知らせ	20
スポーツ社会学研究投稿の御案内	21
国際交流委員会からのお知らせ	23
事務局からのお知らせ	26
総会報告	28
新入会員・住所所属変更	29

## オリンピックは変わるか—GreenSportへの道

チエルナシェンコ著／小椋 博・松村和則編訳 A5版 280頁 本体2500円

—スポーツは今、ドーピング（人間的自然）とエコロジー（環境的自然）という二つの自然を脅かしつつある。「スポーツ振興」の量的拡大よりもスポーツの質を強く問い合わせる、カナダの環境問題コンサルタントである著者が贈るメッセージとは何か。それは単に対症療法だけでなく、より根本的な「スポーツと自然」を考えるための重要な示唆である。

環境問題の解決のために我々はスポーツの領域で今、具体的に何ができるのか。自治体、N G O、スポーツ団体などさまざまな方面で本書が活用されることを望みたい。

### [主目次]

#### セクションA：スポーツのグリーン化—なぜそれが必要か？

- 第1章 健康な身体、健康な地球：そのつながりをつくること
- 第2章 政治的压力の増大と経済的影響力
- 第3章 グリーンスポーツ倫理の必要性
- 第4章 持続可能なスポーツの原則を定義する
- 第5章 すべてのレベルで持続可能なスポーツを促進する

#### セクションB：スポーツのグリーン化—いかにすればそれは可能か？

- 第6章 施設の建設と運営
- 第7章 大会の遺産：環境、社会、経済面で
- 第8章 環境評価基準の開発：招致活動をグリーン化する
- 第9章 グリーントラベルとグリーンツーリズム促進
- 第10章 すべてのレベルでスポーツのグリーン化を  
—実践的ガイド
- 第11章 各施設に関する提言
- A ケーススタディ：彼らの物語を語る
  - 1 リレハンメル：オリンピック・グリーン化計画への道
  - 2 シドニー2000年夏季オリンピック大会
  - 3 マサレ・ユーススポーツ協会—きれいにしよう、フィールドを、そして別の場所も
- B 事実と数値：経済効果の数量化
  - 1 カナダ・オンタリオ州エトビコク市
  - 2 1994年リレハンメル冬季オリンピック大会—環境保全策
  - 3 Greening the Hill—策定経費と削減額
  - 4 1994年大英連邦協議会ビクトリアの推定便益
- C 行動規準

## 会長挨拶 井上 俊

本学会も、1991年の発足以来、早くも9年目を迎えています。その間、大筋では着実な歩みを続けてきました。第Ⅲ期・池井会長のもとで開催された国際シンポジウム「スポーツは世界を変える」(1997年3月)の成果も、日本スポーツ社会学会編『変容する現代社会とスポーツ』(世界思想社、1998年8月)として出版されました。また懸案となっていた日本学術会議への団体登録の件も、前事務局のご尽力で、この5月に申請の手続きを終えることができました。こうした基盤の上に、さらに活発な知的交流の場を築いていきたいものです。

今期は、理事長を森川貞夫理事に、学会誌編集長を佐伯聰夫理事に、研究委員長を亀山佳明理事に、そして事務局を小椋博理事を中心とする香川大学にお願いすることになりました。また、来年3月の第9回大会は、平野秀秋会員を実行委員長として上智大学で開催される予定です。

この学会の楽しい雰囲気と活気ある知的交流を維持し発展させていくために、会員の皆様のそれぞれの立場からのご協力をお願いいたします。

## 第8回大会特集

### 第8回ひろしま大会について 大会実行委員会

実行委員長 荒井貞光 (広島市立大学)

先年の神戸の総会で受諾の挨拶をしながらイメージしたのは、夜の原爆ドームの火と平和公園の3月末頃ピークのお花見の宴であった。社会学も夜型の芸風(ミニ・シンポ)で井上会長が社会学って結局は芸風ですよ、とおっしゃたがその通りと思います)でやればもっとアクチブ&ポジティブになるのに、どーも屋型スクエア過ぎる。平和の火の夜のシマールさと桜の樹の下の宴会のファンタジーを2次会くらいで体感してもらいたい、さすれば2日目の一般発表等々がおもしろく…。などと不遜なアイデアが祟ったのか、当夜は雨で誠に残念であった。しかし、一次会のパーティーも会場が狭いのに何と100人近い参加者、各大学の院生中心の二次会の焼鳥屋3Fも活況の趣をなしていたし、会員のみなさんの夜の芸風はそれなりに冴えわたり我々実行委員会も楽しめた。会場と宿泊地をセットに、しかも街の中に据えるという企画はそれ自体としては100%の成功ではなかったが、などと自賛する芸風は年代上がるにつれ益々昂進しますね。諄くして申し訳ないが、学会イコール大学イコール教室ではない、寺山修司もどきでいえば、「学会よ、町へ出よう」もありかもしれない。

1日目のシンポ、特別講演(変更ですみません)は約150名、2日目のラストのシンポも80名と、実行委員会としては有り難い人数、それ以上に一般発表の演題も22

題と多く、2日間を通して院生パワーが目立ったことも嬉しかった。「質はどうか」など野暮なことは言わない。量から質ですよ。

自下、ミニシンポ等々のテープ起こしをしています。できたら参加の方には送ります。一週間後の土曜日の昼に、実行委員会打ち上げの花見酒をやりました。10時間近く飲んだなあ。一番楽しんだのは実行委員会ではなかろうか。機会を与えてくれた学会に感謝し報告を終わります。

## 公開シンポジウム

江口潤（産能大学）

連休期間中に、「公開シンポジウムの感想を800字程度で」という課題を頂いた。資料を整理し、私なりの感想をまとめてみた。結果1200字程になってしまった。感想に対する異論反論何でもご指摘頂きたい。

私自身は、1994年に愛知大学で開催された第3回大会以来の参加であり、アジア大会を開催した平和宣言都市広島で開催されるということ、世紀末の1999年の大会であることなど、参加前の大会に対する期待は大きいものであった。

第22号会報の案内に公開シンポジウムの主旨が示されていたが、「人間のスポーツに対する接し方が変わりつつある（企画者）」という実感は、大学生を対象にしている私の職場でも感じていることである。しかし、「潤いの場」、「身体接触の道具」、「勝敗よりも競い合い」という言葉がそれをあらわしているかというとその実感は無い。それゆえに公開シンポジウムに対する期待も大きかった。

3人のパネリストの先生方にはそれぞれ特徴があった。私なりに整理すると、理論編の亀山先生、実践編の高橋先生、トピック編の児玉先生ということになる。

児玉先生には、「平和とスポーツ」をテーマにお話し頂いた。政治とスポーツに関する問題が研究課題となるスポーツ社会学の領域から、更に踏み込んだ市民レベルの平和行動とスポーツの関係を講義頂いたように思う。私には、平和運動とスポーツとの共通項が見てこなかった。平和運動の目的や実践に対する私自身の知識の欠如が原因であるが、「スポーツが平和のために行なわれる活動である」とする視点の欺瞞を私は指摘したい。

亀山先生には、「滑走感覚・癒しとスポーツ」をテーマにお話し頂いた。「新たなる期待」の構造を分り易く説明して頂いた。ロック・クライマーを引用し、深いフロー経験（あるいは滑走感覚）が現代社会のストレスを癒すというのが先生の枠組みであった。

高橋先生には、「気づきとスポーツ」をテーマにお話し頂いた。身体を日頃蔑ろにしている一般人に、身体の気づきの問いかけが身体に関心を向けるきっかけを作ってくれることを指摘頂いた。多くの時間をその実践事例の紹介にあてられた。日頃人は自分の体に無頓着である。風邪をひいたり、怪我をしたりすると改めて健康のすばらしさを感じる。この日常性に変化を加え、日頃から身体に関心を向けることで、より豊かな生活を実践できるという訳である。しかし、先生も指摘するように、その後どうなのか。体に気づいた後、その気づきから何が始まるのか。その答えがこれからのが課題になる様に感じる。

3先生のベクトルは「スポーツへの新たなる期待」の意味で、同じ方向を向いていた。しかし、具体的な内容が広範過ぎたようにも感じた。

勉強不足の私には、「21世紀に身体を対象にした教育者（体育教師）は何をめざすべきか」の課題に対し、何かと刺激を頂いたように思う。

最後に、企画、演者の皆さんにお礼申し上げる。

## 特別講演

テーマ 「現状認識、教育、スポーツ」

演者 民秋 史也（株式会社モルテン代表取締役社長）

## 平松 携（尾道短期大学）

民秋 史也氏は、Jリーグのサッカーボール公認球、オリンピックバレーボールの公認球（ロサンゼルス、ソウル、バルセロナ、アトランタ）などボールを製造している。また、世界のボール市場の10%を占めている会社の社長さん。講演と講演資料（39頁）から簡単に概略を報告する。

世界で最もサッカーの盛んな都市はドイツのケルン（蹴る）であると、ヨークから講演に入られた。ユーモアたっぷりでしかも多弁、その上に情熱感いっぱいの人、とある参加者は語った。

スポーツには国境はない。それはルールが共通であるから。それにスポーツはグローバルでローカルにはなじまない。しかし日本ではローカルになっていた。ヨーロッパでは国境の感度は日本よりかなり薄い。企業内部が国際化している。社内では英語、フランス語、ドイツ語の3カ国語が話せないと部長にはなれない。

企業スポーツの現状をみると、バスケットボール、バレー、ボルなど廃部があい続いている。これはスポーツを企業宣伝に利用することで、順調に発展し続けているという企業ではない。（バレー、ボルのスポンサーチームの変遷が好例である。）名門チームが次々に姿を消しているのは、企業倫理の結果である。企業の倫理が優先されることは、スポーツ文化の振興など不可能である。日本のスポーツの倫理が、今求められている。

今、必要なものは、倫理的責任の追及に対する人格的応答である。日銀総裁の速水氏は、「説得さえすればよいというものではない。聖書で Accountability とは、世界の終末に神が人類を裁く、“最後の審判”の場で、神に対する申し開きを示し、それによって生じる結果の責任まで負う覚悟を求めた言葉だといわれている。」（朝日新聞98.3.18）教育界では、教育をして卒業させただけでは、だめである。教育（講演の内容から推測すると学校教育）の結果、どのようにになったか、結果の責任まで求められている。身のまわりによってきた結果まで教育は責任を負わなければならない。大學の授業で学生が引きつけられるようなものがいるのではないか。毎年同じノートで同じ講義をしていて学生はおもしろいか。同じ講義でも学生は毎年入れ替わる。学生は、魅力ある講義を期待し、求めているのではないか。

本日申し上げたいことは、漁場が変わったが魚がいなくなったわけではない。未だ知られていない新しい新しい漁場には魚がたくさんいる。新種の魚もいるであろう。そこに向か

って小生は“わくわく”している。魚や釣り竿を増やし、エサの種類を増やせばいい。個人のあり方に対する発想の転換を図ると展望が開けるという。私の娘は、中学生の時に、茶髪にロングスカート姿、履き物をツッカケて、いわゆる「ツッパリ」で登校拒否をしていた。バレーボールに入部していたので、部員と顧問の先生が家庭に尋ねてくれていた。娘が「ツッパリ」であるため妻は仕事から家庭に戻ってきていた。少し落ち着いてから看護婦さんになるといって病院に行っていた。ところが病院においては、院内で1番に威張っている人（賢い）は、医師であって看護婦さんでないことが解ったのであろうか、医師になると黙ってきた。それから娘は勉強した。医学部に入って今では医師になっている。また父親が働いて帰宅したら、テレビを見ている子どもが、「テレビを見るよりも「おやじと遊ぼう」と言われる「おやじ」になろう。疲れ切った「おやじ」よりも、テレビよりもおもしろい「おやじ」のほうがよい。子どもは、生き方の見本の「おやじ」を見たがっている。そういう「おやじ」になろう。

最後に指導者論について、簡単に述べられた。それは、これからは知識以外に勝負する、という言葉で具体的に、健康や体力、可愛げ・愛嬌、夢を描く・育む心、前向きな性格、思いやり・優しさ等であった。講演時間がなくなってきたところで、会場から質問を受けたところ、企業の管理者から知識偏重の社員が多いが、アイデアを出す社員の育成はどうするとよいか。また、ポール業界の世界販売戦術の裏舞台を聞かせてほしい等の質問が出た。会場からの質問に対する説明は、紙面の関係で割愛する。講演時間が60分の予定時間であったが90分にもおよんだ。

## ミニシンポジウム

### 小谷 寛二（吳大学）

第8回日本スポーツ社会学会（平成11年3月27日）

「スポーツ社会学の評価をめぐって」

— 社会学者・体育学者双方の期待するスポーツ社会学 —

演者：平野秀秋（法政大学）・山下高行（立命館大学）

司会：小谷寛二（吳大学）

パネリストとフローラーによるディスカッションを、スポーツ社会学のポテンシャル、課題・問題点、テーマ目的達成のための条件、方法、などの視点から再整理して報告する。

まず、社会学出身の立場から平野パネリストは、①社会学においても誰かが言うとそれを使い、②5年遅れて日本に入ってくる、③調査が少し多過ぎる、④小さなイッシュを書いている状況にある、⑤社会学は約30のグループに分かれている。・・・と社会学の現状を述べ、その点、スポーツ社会学は全員が囲われていて、問題が少ないのではないかという（Q:山本会員は、日本の社会学者はなぜスポーツとかレジャーを自分たちのマーケットの中に位置づけられないのかと？ / A:平野パネリストは社会学者にはそれがよく見えないし、どのように研究したらいいかわからない。池井会員は新しくて戸惑いがある。）。

さらに、社会学者は社会問題の核心にそんなに近くにいないが、スポーツの近くにいるというスポーツ社会学者のポテンシャルを強調した（小椋会員は自明過ぎて報告がないという点もあるが、核心に居ながら知らないという不明性もあるとの指摘）。しかし、スポーツ社会学の人は、あまりにもスポーツに身近すぎて、自明すぎて、その重要性を感じていないのではないか。この8年間の報告で少なかったと、新たな課題・問題点を指摘した。そのための条件として3つの視点を挙げ、一つはルールであり、次にお金であって、ややこしいが組織である、と提示した（荒井会員は、マーケットをスポーツ指導者・関係者だとし、そこに食い込み、例のお金と組織とルールを自分たちで変えていくような学会にしていかないと尻すぼみになるのではないかと）。そして、小谷会員のEポートの発表を事例に、この報告は全部が見えていて、データを投げ出すだけでもインパクトがあるという。研究方法としては、表現は悪いが、ディープスロート（deep throat）のところがあつてスポーツの社会現象が見えると強調し、なまじっかではできないだろうが、その巨大ネットに限らず、そこにおけるルール改正、お金の問題、それに組織がわかると、現代社会とスポーツの関係が随分とわかってもらえる、と付け加えた。もっとも、社会学理論は大事で先人がいるということは尊敬しなければならないが、その時になまじっか、社会学者がどう考えるかとか、社会学から見ると何かが解けるのだと思わないほうが多いとまでいう。スポーツ社会学者がスポーツの核心の近くにいるほど、社会学者が社会現象に近いわけではない。自分の目の前にあることを学ぼう。それは金・法（ルール）・組織だと。一方、体育学出身の立場から山下パネリストは、スポーツ社会学は社会学を戦略としては利用すべきだ、とまず主張した。その根拠を、樋口聰を引き、「脱領土化」と「学際性」（科学論からみたスポーツ科学の＜内＞と＜外＞、体育学研究44:42-46, 1999）を進めることに視点をおいて強調した。そしてスポーツ社会学はその変化と制度上の基盤に立脚しているとスポーツの科学や場の変動を主張した（新井野会員は他の科学もそうであり、やっと並んだとの指摘）。大学体育の脱領土化をあげる。それによって、スポーツ科学の研究者にとっての基盤が大きく変化してきたのである。立命館大学のリエゾンという形の産学共同路線の進行や、韓国におけるスポーツ産業への傾斜がそうである、と例示した。象徴的な研究者の変化として、小谷会員発表のEポートによるスポーツの生活空間への共有化と自己組織化、環境教育へのコミットメントなどをあげて体育の基盤変動の問題提起を指摘した。こうした制度的変化、社会という変化にいかにスポーツ社会学は対応していくといけないといけないか、ということである。そういう意味で現実の大きな動きに合わせて学際化とかいろいろな意味でスポーツ科学が進んできているが、スポーツ科学はほとんど旨くいっていないと述べ、「批判しうる」と「脱領土化と学際性」とを展開しているスポーツ社会学が唯一旨くいっている例ではないかと、その可能性を主張した。そういう意味では社会学は、役に立つか立たないかはおいておいて、戦略基盤として重要であると強調した（山本会員は、間接的に関わっている中で、最後は社会学の概念によってしまって、分かったフリをする。この繰り返しがどうもスポーツ社会学者にあるような気がする、と指摘した。この点について、菊会員はわれわれは社会学の概念や理論に依拠し安心してしまう身体をもっている、という。何もないところから説明したりできないと）。

最後に井上会長から、①作田啓一を引いて「学問は結局のところは芸」ではないかと。②社会学は面白い研究と価値のある研究の2点があるということ。③機械的にある方法を勉強して社会学の対象に適応するという方法は誰でもできること（自然科学はある方法で実験すると誰がやっても同じ結果が出る）。④特に社会学はなにかアバウトなところがあって、個性がそこに必ず入ってきて、いろんな方法があるが、その方法ひとつだけを特定の対象に適応して、面白いものが出てくるということはほとんどないということ。⑤社会学にはいろんな方法があるが、現実に何かを分析するときは対象との関係でいろんな方法を使ってみること。⑥対象からのフィードバックのようなものを組み入れながら分析を進めていくことに、どうしてもその人の個性とかそういうものが入ってくるから、そういう意味で一人一人の芸があるのでないかということ。・などについてコメントを戴けた。

さらに、社会学そのものにそういうところがあるし、特に今までオーソドックスな対象にしてこなった領域は、特にそういう性質が強く、家族や村落とかそういうものと比べると、むしろ平野パネリストと少し違うが、方法論的にもスポーツ社会学にはいろんな可能性があって、アバウトな形で比較的自由に自分の関心に向かってやっていくと、なんか結構面白いものが出てくるはずであるから、面白い研究をとにかくすることであると励ましの言葉があった。

今、われわれは、随分と複雑系の社会のなかにある。これまでわれわれが研究してきたのは、社会現象を観察して分析し、理論化してきたわけだが、どちらかと言うとそのプロセスをブラックボックスにおいて理論化してきたわけであった。すると答えが2つ、3つとでてきたのではないだろうか。どうもこのブラックボックスのところを平野・山下両パネリストは、スポーツにおいて簡単な社会学理論を使うのではなく（当面は戦略として使いつつ）、事実を暴き出して、現実をブラックボックスから引き出さないと、スポーツ社会学の社会現象は見えにくいのではないかということのご指摘ではなかったかと思う。

今後、機会があれば、さらに議論を積み重ねてみたい。

## 情報交換（スポーツ社会学教育）

小椋 博（香川大学）

昨年に引き続き、「スポーツ社会学教育」をめぐって情報交換会をもった。今年のテーマは、「スポーツ社会学の魅力を探る」と題して、お二人に話してもらった。これは昨年の討論会の最後に、魅力ある授業を行うためには、スポーツ学会の魅力を常に発見し、構築する必要がある、という意見から設定したものである。教員がスポーツ社会学に魅力を感じ、魅力的な授業を進めることで、多くの学生の関心を呼びたいと思いからである。

1 東元春夫（京都文化短期大学）

東元さんは、「現代文化論」の講義科目として、スポーツ社会学を教えてい

る。10回分の講義テーマとそれぞれの概略を紹介し、さらに次のような「スポーツ社会学」授業の特徴を指摘していただいた。

スポーツ社会学の授業では：

- ・「何でもあり」でやることができる。どんなテーマでも、たとえばエスニシティ、ジェンダー、マス・カルチャーなど、扱うことができる。
- ・Interdiscipline から Transdiscipline (超領域) 的な学問として特徴を出す。授業の内容に様々なテーマを加えやすい、という意見が他の会員からも聞かれた。遊び、身体、暴力、薬物、スピード、賭など人間の深淵を垣間見ることができる学問といえるのではないか。下着の話から、スポーツを論じるという参加者もいて興味深かった。

## 2 松田恵示（岡山大学）

松田さんには一般教育として学生が取りつきやすく、魅力を感じるスポーツ社会学という観点から話していただいた。そしてその中心に「遊び」をおいた授業の方法と内容について紹介がなされた。

- ・スポーツ社会学における「遊び」の視点の面白さ、「遊び・スポーツ」のなかに社会を発見する面白さ、を学生に伝えたい。
- ・スポーツ社会学では遊びがテーマであるため、授業を“遊び”として、これまでの授業形態とは異なるやり方をとることも容易である。授業観の転換が図られやすいのではないかという意見も出された。

今年も昨年に引き続き、学生の積極的な授業への参加がなかなか見られない、という共通の課題（悩み）が出されたが、それが授業の内容的な問題なのか、方法の問題なのか、その辺が時間の制約もあって充分つめて論議できずに終わってしまった。今後もこの種のセッションを開くとしたら、時間帯など検討を要すると思った。最後にスポーツ社会学教育に適切なテキストがないのが問題であるという意見も出され、この点についても今後検討する必要があろう。

## 一般発表

江刺正吾（奈良女子大学）

角田聰美会員の「女子体育の形成過程に関する研究—反省史的なアプローチから—」は、学校体育において現在も男女別習が主流になっているのは、女子体育が男子体育とは別のものと考えられてきたためであると仮定し、そのルーツを明治期に求めて検討した歴史社会学的な発表である。検討史料としては、私立大日本婦人会の機関誌『婦人衛生会雑誌』の中から、家庭衛生、衣服の改良、女性と運動、女子体育等々に関する記事を取りあげ、発表者はその内容について検討している。

その概略は次のとおりである。私的な領域である家庭衛生は女性の仕事でありそのことを女性自身も認識していること、女性の健康は日本人種改良という目的達成の条件であること、日本人の身体や衛生の状態をアジアの他民族と比較し日本人のアイデンティ

ティを強調していること、男性からみた美と健康に関する女性観を提示していること、普段の運動不足が女性の弱い身体をつくっていること、女性の健康増進のために衣服を改良する必要があること、月経の時には体操科を休むことが望ましいこと、そして女子の身体を強健にするために女子体育を奨励していること、などである。この『婦人衛生会雑誌』に掲載された記事を総合すると、女性という身体に課せられたジェンダーロールから抜け出せておらず、また、女性の身体の特殊性を強調するのに「母」を持ち出し、性差を認識しその差異を拡大しているといえよう。

この発表に関しては、「女性を主体とした反省史的アプローチ」という研究視点とはどのようなことか、歴史社会学的研究とは何かといった質問が出されたが、深い議論には発展しなかった。しかし、これまであまり取りあげられなかった史料の記事を丹念に探索しそれをきめ細かく分析した研究態度は高く評価できる。

次に、谷口雅子会員の「体育／スポーツにおけるジェンダーと規範の生成」の発表は、大澤真幸が主張する「資本主義とは経験可能領域をより包括的なものへと置き換えていく社会システム」という考え方をベースにして、日本における女性スポーツの変容を論じている。すなわち、大正10年代は統一的な国民の形成が重要視される社会であったので、男と女の境界を排他的で強固なものにするため、女性が現実の規範からスポーツから規範の中に入ることによって社会の秩序を乱す恐れがあることから、女性はスポーツから排除されていった。しかし、1970年代になると、資本主義の発展によって、かつては明確な境界によって分けられ絶対的な差異であった性別が、同じ人間であるという同一性を前提とした相対的な差異にすぎないという認識が定着し、女性がそれまで不向きといわれたスポーツにも参加するようになったのである。なお、スポーツの言説には女性のスポーツを揶揄するものもあるが、これは規範がより包括的なものに変化する過程に生じるひとつの社会的葛藤とみることができる。

この報告に対しては、スポーツの問題を妥当／非妥当という形式のジェンダー規範という視点から考察することの新鮮さ、あるいはスポーツの世界におけるデモクラシーの発展などのコメントがなされた。

二人の一般発表に関する座長としての感想としては、研究史料の選択とその解読の仕方、新しい研究視点の提案など、今後における研究の深まりと広がりが期待される若手の発表であったという印象である。

## 清水 諭 (筑波大学)

メディア・スポーツ研究の動向と「九州一周駅伝」の報道

山本教人 (九州大学)

山本氏は、「第47回九州一周駅伝」に関する『西日本新聞』(大会の主催者の一つ)での記事(写真を含む)(1998年11月1日~16日)に関して量的、及び質的分析を行った。彼は、それらの記事において「勝負」の物語が中心的なテーマとなっており、そのことがわかりやすく、ほかのさまざまな大会につなげて考えられ、かつ主催する新聞社としてイベント価値の引き上げを狙って描かれていると述べる。さらに、一連の記事から「ローカル・アイデンティティ」「伝統的性役割」「困難を克服する努力」などが解

釈できると結論づけている。また、研究留学していたJanet C. Harrisなど北米におけるスポーツに関するメディア研究をレビューして理論的な前提を得ようと意図している。

こうした報告に対して、1)メッセージの生成する場としての記者 2)メッセージの形式としての広告 3)メッセージの解釈の場である個人(その差異や地域性の視点)にもっと注目すべきとの意見が出た。山本氏は、今後継続して行うメディア研究の第一歩として新聞の記号論的解釈から始めたのだが、フロアの「苛立ち」(私の解釈。別の人から見れば「熱気」とも解釈できよう)から分かることは、とっかかりとしてこの解釈の方法自体への言及、すなわち山本氏も言っているように「意味の霸権をめぐる闘争の場」自体をダイナミックに描き出せるかどうかに力を注ぐべきことがはっきりしたよう

## オリックス・ブルーウェーブと阪神淡路大震災に関する印刷メディアについて

高橋豪仁 (奈良教育大学)

高橋氏はアンケート調査の結果、阪神淡路大震災の年に神戸在住の97%の人々がオリックスによって「勇気づけられた」と回答したのを受けて、こうした集団的記憶がいかに形成されたのかを「神戸新聞」、「市民のグラフ こうべ」、「ニューひょうご」といった印刷メディアにおける「物語」の解釈から論じようとした。彼は、オリックス優勝によるメディアの「物語」が読者自らの出来事の体験と重なり合って集合的記憶が形成されたとする。また、マクルーハンの言う「ホット」な印刷メディアは、大震災に関する体験をふまえることで「クール」となったという解釈を示した。

この発表に対して、マクルーハンの「ホット／クール」は、プロセスについて論じているのではないという指摘、そして、「メディアとしての新聞」に加えた「メディアとしてのスポーツ」に対する考慮が欠如しているとの意見が出された。また、先の山本氏の発表と同じく、読者の日常生活に接近し、メディアが生成する「物語」とは反対の言説をも含み込んだエスノグラフィーが必要であると思われる。

私たちスポーツを対象とする研究者は、社会学の理論を前提として思考することが必要なのだろうが、対象としているものとそれらの理論が見てきたものとは乖離している場合が多い。スポーツに関する研究者にとって特に必要なのは、理論を考えながらもそれに左右されすぎない柔軟性と、人間の営みとして表出していることを観察し、すくい上げるきめ細かさなのだと二人の発表から改めて感じた次第である。

## 白石 義郎 (久留米大学)

「スポーツイベントの地域形成機能」

鈴木守(上智大学)

発表は、レーバークーゼン市とその地のドイツ・ブンデスリーガーのサッカー・チームBayerの関りを現地調査したものである。

発表は、OHPなどを使って、レーバークーゼン市の沿革や観客のようす、スタジアムの姿などが紹介され、それに基づいて分析がおこなわれた。

(1)レーバークーゼン市はバイヤーという企業を中心とした市であり、企業を核とし

てスポーツクラブが発達した。(2)スタジアムはホテルや家族観戦用の娯楽施設があり地域住民の凝集の核になっている。(3)観客は「日本にくらべて中年層の成熟したファン層」があり、家族連れも多い。(4)ホームゲームの賑わいは、かなりの市民にとって日常生活のリズムの基点となっている。

この発表に対して、いくつかの質疑がなされた。

(1)「Jリーグでは企業主体が根付かないのに、レーバークーゼン市ではうまく機能したのはなぜか。」

第一の理由は、企業の発展にともなって、地域（したがってスポーツクラブ）が発展したことにある。Jリーグの場合とは、歴史的経過が違う。第二の理由は、市民社会の成り立ちの違いがある。例えば、（ドイツでは）行政の仕事は、市民生活を豊かにすることと考えられている。

(2)「企業がだめになつてもやっていける社会装置は何か。つまり、バイヤーという企業がだめになつてもクラブを維持できるか。」

社団法人にするなどの方法がある。

終わりに、現状紹介に多くの時間を費かれたため、分析の時間が限られたことが残念だった。比較の枠組みの説明をもっと聞きたかった。

#### 「祝祭としてスポーツイベントと<反-近代>」

野崎武司(香川大学)

発表の要旨は以下のようにあった。

(1)スポーツイベントは「抽象的な時空と自己の自己性」を産出する呪術装置である。

(2)産出された「抽象的な時空と自己の自己性」とは、政治が産出した共同体イメージ（たとえば「美しい日本」といったような国家イメージ）である。

(3)このイメージの共有は、参加者の身体（間身体性）を通してなされる。

この発表に対して、以下の質疑がなされた。ただし、発表の論旨が極めて抽象的であったため、質疑も自ずから抽象的なものとなった。できる限り論議を正しく伝えたつもりであるが、私なりの理解のしかたであり、理解のためいくつかの言葉を補つたことを断つておきたい。

(1)「祝祭とは何か。特に、超越性とどう関るのか。この超越がナショナリズムに閉ざされたものになるのはなぜか。なぜ反近代なのか。」

祝祭は身体が結集される空間である。人々が集うところに間身体性が生まれる。祝祭という装置によって、（共同体という）「まなざし」—幻想の共同体—が生成される。

(2)「『新たなる幻想の共同体に加担しており、別の形の差別・排除のなまざしを培う』とあるが、差別は抽象的なものではない。差別を生み出す具体的な現場の中で考察をおこなうべきだろう。抽象的なもので終始した意図がわからない。」

身体的なものの回復だけでは、未来に繋げないということを言いたかった。（以下、時間ぎれ）

#### リー・トンプソン（大阪学院大学）

「ショービジネスとしてのプロレス」

飯山善昭（東海大学大学院）

現在では45のプロレス団体が存在していますが、テレビ中継されているのは2つのみ、しかも深夜になっています。視聴率も1ケタ台まで落ち込んでいます。発表ではその理由を検討しました。まず、1962年の「ショック死事件」をきっかけに、プロレスはショービジネスであるという見方が定着しました。そして、1960年代の高度経済成長は「敗戦ショックや外国人コンプレックス」を和らげ、強豪外国人レスラーの頻繁な来日がその「商品価値」を下げました。その変わりに、日本人レスラーによる危険な大技の試合が主流になりましたが、これは力道山時代の善玉日本人レスラー対悪玉外国人レスラーという図式ほど明白な対決ではありません。結局プロレスは大衆文化からマニア文化へと変化しました。

ほかの要因（若者文化、メディアの変化など）の考慮も必要であるというコメントなどフロアからありました。

#### 「柔道の近代スポーツ化」—“柔能く剛を制す”の理念と技術—

上水研一郎（東海大学大学院）

現在の競技柔道と、「柔能く剛を制す」という嘉納治五郎の理念との違いを考察されました。体重制の導入（1964年）、国際柔道連盟試合審判規定の設定（1967年）、組み手争いをなくす目的の国際規定のルール改正（1994年以後）、「偽装攻撃」の厳しい判断などは「一本柔道」から「ポイント柔道」への変化をもたらしました。その結果、「嘉納の柔道の特徴であった“柔能く剛を制す”的姿はなくなり」、反則による勝敗の決着が増えていることが指摘されました。競技者中心のルールからメディアや観戦者中心のルールへと変化しました。

質疑は嘉納治五郎の「本来」の柔道の姿に集中しました。とくに「柔能く剛を制す」とは、嘉納自身よりも、亡きあとの講堂館が強調したものであったと、井上会長から指摘がありました。

#### 井上俊（京都大学）

「ホイジンガとカイヨワの再考—スポーツ社会学における<パースペクティブとしての遊び>と<コンテクストとしての遊び>の混同」（岡山大学・松田恵示）

これまでのスポーツ社会学は、ホイジンガとカイヨワの「遊び」論から、特に「自発的な意志による参加の自由」という観点を強く受けとってきた。しかし、スポーツという遊びの体験の現象学的な考察からは、例えば中井正一らにみられるように、「自発的な意志」をも離れて「同調関係」に身を委ねる「自由」と言う側面が浮かび上がってくる。

「自由」に関するこれら二つの側面を「水平」と「垂直」という言葉で表すとすると、そこには、それぞれ異なる他者関係が認められることになろう。そして、このような視

点からすると、ホイジンガとカイヨワの「遊び」論は、この「水平」と「垂直」のせめぎあいこそを問題にしたのではないか、という解釈が可能になる。これが本報告のポイントであり、この新たな解釈の可能性を、松田氏は「パースペクティブ」と「コンテクスト」の混同という表現によって指摘しようとした。

#### 「臨床－スポーツ社会学は何をすべきか」（山梨大学・加藤朋之）

この報告には、三つのメッセージが含まれている。まず第一に、言葉に頼って構成されているこれまでの学術分野の限界をスポーツ社会学が突き抜けていく可能性として、言葉が介在しない身体活動の相互行為の場面を取り扱う必要があること。第二に、そのためには、人間の感性に根ざすこの種の身体活動の「経験」を研究者が持たなければならぬということ。そして第三に、スポーツ社会学はスポーツを対象にするかぎり、そのような身体活動の経験を含むスポーツから逃れることはできないということ。これら三つのメッセージを「臨床の知」というキーワードを媒介にして結びつけ、スポーツ社会学の認識論を再検討しようとするところに加藤氏の報告のポイントがある。

#### 「アンチ・ドーピングによる不平等性の自明感」（横浜国立大学・海老原修）

保健医療機関の診察や入院に際して、国民健康保険法が3割の自己負担を求めており、この場合、身体の3割が私的財産、7割が公的財産と解釈できる。従来からいふと、この場合、身体は10割が公的財産である。和歌山・保険金詐欺事件の林真須美容疑惑では、身体は10割が公的財産である。和歌山・保険金詐欺事件の林真須美容疑惑者が自らの身体を故意に損傷して身障者手帳を取得し、公的手当てを受領する構図は、自己の身体を私的財産から公的財産へと変換する謀りごとともいえる。同様に、マーク・マグワイア選手の筋肉増強剤の服用は、副作用の危険を冒しながら、神話的・象徴的価値の達成を図るものであるが、将来その危険が現実化した場合には公的援助が与えられるであろう。つまり、彼は自らの身体を神話と象徴の代価とし、米国民はその神話と象徴を将来ありうる公的保証の対価としている。またテクノロジーの発展は、一方で身体の人工化によって身体障害者の身体能力の可能性を拡大しながら身体的不平等性を自明化させ、他方で身体の制度化・序列化を構造的に細分化することで新たな差別化を促進するドーピングによって精巧につくりあげられる強靭な肉体から再利用可能な屍体（臓器移植）へと。

以上の三報告はいずれも理論的思考の強いもので、それぞれに興味深い論点を含んでおり、フロアからのコメントや議論も活発であった。今後一層の発展を期待したい。

#### 金崎 良三（佐賀大学）

高峰氏の「ウォーキング・ブームの主体要因に関する実証的研究（1）－ウォーキング実施者の運動・スポーツ経験に着目して－」は、ウォーキング実施者は他の運動・スポーツ実施者に比べて、過去に運動・スポーツの経験者は少ないという仮説を検証しようとしたものである。一般的なスポーツ実施の場合、過去の運動・スポーツ経験は有力な規定要因であるといつてよいが、ウォーキング実施の場合はその運動特性からして他のスポーツ種目の場合とは異なることは容易に考えられる。ここでは、ウォーキング実施

者は学校卒業後に運動・スポーツ経験のある人は少ないという結果が示されたが、質疑のなかで最も問題となったのは卒業後の運動・スポーツ経験の捉え方についてであった。卒業後から現在までのかなり長い期間において、社会人の運動・スポーツの経験を調査する場合、ある程度大雑把にならざるを得ないが、それでももう少しきちんとそれをパターン化するなりカテゴライズすることが必要であったと思う。

世戸氏の「非営利団体における体育事業の運営－戦後のスポーツクラブ活動実態を事例として（1）－」は、YMCAという非営利組織の事業運営について、人的資源、体育施設、プログラム、財政などの事例報告がなされた。YMCAの理念や事業についてはよく理解できたが、フロアからはその方向性や地域スポーツ行政との競合についての質問がなされた。私見であるが、例えばYMCAの経営するスポーツクラブは、他の行政や民間団体（非営利・営利）が普及に努めたり経営したりするスポーツクラブとどう違うのか、また体育プログラムにしても、他の団体の進めるものとどう異なるのかといった視点からの説明があれば、もっとわかりやすかったのではないかと思われた。

#### 厨 義弘（筑紫女学園大学）

地域における子どもスポーツへのコミットメントがコミュニティ・モラールに及ぼす影響に関する研究

#### 赤堀 方哉（神戸大学大学院）

明石市の子供会ソフトボール・バレーの指導者及び保護者を対象に質問紙による調査の実施結果が発表された（配布数500、有効回答数（率）237（43.7%）。調査項目は個人的属性、子どもスポーツへのコミットメント状況、地域内交流、地域活動参与、コミュニティ・モラールの5要因群。「個人的属性や子どもスポーツへのコミットメントは直接的及び間接的にコミュニティ・モラールに影響を及ぼす」という仮説の検証結果が報告された。コミュニティ・モラールに対して最も強い影響を持っているのは「地域活動参与」であり、次いで「地域内友人数」。「子どもスポーツコミットメント」と「居住」はコミュニティ・モラールに対しての直接影響力は弱いが、子どもスポーツコミットメントは地域活動参与と地域内友人数に対して有意なパス係数を示し、地域活動参与と地域内友人数が媒介変数として有効であることが示された。

発表に対して調査対象者（指導者と保護者）の分類があいまい、両者と一緒にして統計処理したことへの疑問、コミュニティ・モラールの質問項目選定と尺度の作り方の妥当性、コミュニティ・モラールには地域差が存在するという視点の欠如、地域に未関与の人は対象になっていないが、未関与の人と比較する必要があるのではないか等々の質問・指摘がなされた。この種の質問紙調査の場合、調査対象者の抽出と質問紙の項目選定や尺度の作り方の精度を高めることが最も大切であろう。またテーマからすれば当然、子どもスポーツへのコミットメントの強弱の差がコミュニティ・モラールにどんな影響を及ぼすかという視点が研究の中心になるはずで、その点に焦点化した研究に一步進められることを期待したい。

## 子どものスポーツの社会化—子どもスポーツの領域固有性— 山本 清洋（鹿児島大学）

子どもスポーツの分析を通して、子ども文化の構造的特性の一部を明らかにすると共に、子どもスポーツの社会化をめぐる課題・問題状況を解明しようとした発表である。子どもスポーツの特性・領域固有性を証明するために組織的スポーツ（ここでは少年サッカー）を開明的面接法という手法を用いて分析された結果が発表された。調査対象は、1985年、1986年の全国少年サッカー大会、1993年南日本少年サッカー大会の出場少年と指導者。調査方法は箕浦康子の考え方をもとに、組織的スポーツから8つの意味体系を抽出し、その中から視覚的データに加工できる戦略性・分業性・合理性・大人主導性を内包したプレイ場面をVTRで再現しながら、同一画面に対する指導者と子どもの解釈の違いを明らかにする中から、子ども文化、子どもスポーツの固有性を解明しようとしたものである。

調査結果から子どもスポーツの社会化状況に関して、（1）組織的スポーツの意味体系による過社会化状況、（2）子ども社会の特性である「無縁性」の希薄化、（3）組織的スポーツ価値が遊びの世界でも優勢、との結論が示され、また今日的社会化のもとでの子どもの特性3項目、子どもスポーツの領域固有性4項目の結論が導き出された。子どもの遊びやスポーツに対して、現場に出かけゲームを直接観戦し、解釈的面接法といふ手法を駆使しての資料収集という丁寧な手法から導き出された解釈や結論は貴重である。

調査結果を基に今後、子どもスポーツから大人スポーツ（組織スポーツ）への橋渡しの時期や方法をどうするのか等の現実的問題や手法の解明に研究が発展することを期待したい。

## 平松 携（尾道短期大学）

### スポーツ・ボランティア教育に関する研究 -長野オリンピックスポーツボランティアの実践報告-

発表者の依田充代（日本体育大学短期大学）氏は、1998年長野オリンピック大会で、専門学校の一般教養科目において、ボランティア養成科目として教育的な効果が得られたか、実践活動から報告された。具体的な方法として、長野オリンピック前と後の調査結果から考察している。それによると、ボランティア教育が進んでいない現状で、長野オリンピック大会は非営利性無償性の側面がつよく、「自主性・主体性・能動性」は主催者から期待されず、「公益性・市民公共性」は現在のオリンピックでは疑問が残った。しかし、ボランティア教育を受けた実践のなかでは、少なくともボランティア活動を通して、1つの体験学習ができたと評価できる実践があつた、と括っている。

## 「川に学ぶ社会」に向けてのリバースクール社会実験に関する事例研究

発表者の小谷寛二（吳大學社会情報学部）氏は、「川に学ぶ社会」に向けてのリバースクール社会実験にこれまで関わってきたなかの事例を報告された。

これまでの河川環境は治水・利水管理にあったが、近年は川を見直そうという動きが出はじまってきた。河と人間との取り組みが進み、建設省も諸施策を講じて始めた。

「河の復権は子どもから」とリバースクールが行われている。子ども達が川から遠ざかったのは、川の汚染や構造変化によるものが、「川での事故責任」に対する大人達の恐れがあった。しかしそれも薄らいできている。「リバースクールの取り組み」から、社会実験の進め方、交流連携の体制づくり、川のルールづくり、プログラムの作成など、具体的に提示された。北上川のリバースクール、北海道の川塾などを具体的に事例を紹介し、現状と課題や問題点を明らかにされた。

## 佐藤利明（岩手県立大学） 三好洋二（山口大学）

- ・「等身大」メディアのなかの長野五輪—南信・松川町の月刊「はこべ」を事例として  
：筑波大学大学院 橋本 政晴
- ・長野オリンピックが地域スポーツクラブに与えた影響  
：筑波大学大学院 東方 美奈子
- ・高齢者Aの長野五輪：筑波大学 松村 和則
- ・自然の規範的構成と長野冬季五輪環境問題：香川大学 小椋 博
- ・1998長野冬季五輪開会式のテレビ放映  
—オリンピズムへの視線—：東京都立大学 幸本 直文

最初の橋本報告は、巨大なマス・メディアによって媒介された長野五輪を、暮らしという日常の時空間のなかで再考するために、「ミニコミ誌」と呼ばれるメディアのなかに書き記された文章をもとに考察したものであった。メディア・スポーツ研究に一石を投じようとする研究であったが、「ミニコミ誌」を読んだ人びとがどのように変化し、いかなるネット・ワークをつくりだしていくのか、受け側の分析が課題として残った。

二番目の東方報告は、急速、長野五輪のバイアスロン競技の会場地となった野沢温泉村のスキークラブが、外からやってきたよそもののイベントである長野五輪を、地域の自前の論理（「守りの思想」と「共同精神」）によって、地域振興に結びつけていった事例報告であった。いわゆるスポーツと地域開発の研究課題に迫る報告であったが、クラブの構成メンバーが、長野五輪をどのように受けとめたのか、いまひとつ確認できなかったのが残念である。

三番目の松村報告は、ボブスレー競技会場となった長野市浅川地区を対象に、スパイラル施設開発に土地（山林）を売却した地区住民と、開発に反対する住民の「語り」から、スポーツ（オリンピック）開発と地域の問題を解きほぐそうと試みた報告であった。いわゆる「口述」の手法で課題に迫るものであったが、インタビュービデオの音声

が出ないというトラブルによって、研究方法がどの程度可能であったのか確認できなかつたのが残念である。

四番目の中間報告は、「自然観」がシンボリックな意味の反映によって多義的であることを整理を通して、長野「環境」五輪の問題にアプローチした。今回の報告内容を枠組みとして、長野五輪の環境問題がどのように捉えなければならないのか、現場に歩みいる分析へのいわば「助走」にあたる報告であったと位置づけられるのではなかろうか。

最後の外本報告は、現代のメディア・リテラシーの問題を前提に、長野五輪のテレビ放映にオリンピズム（オリンピックのヒューマニティーの原理化）が反映されたかどうかを、放送プログラムの分析を通して検証した。しかし、オリンピズムがむしろ競技場面においてどうメディア化されたのか、さらに、受け手側の分析への踏み込み不足などが気になった。

## 「第8回学会大会参加記」

-はじめての発表を終えて-

飯山 善昭（東海大学大学院）

今回の学会大会にて、「ショービジネスとしてのプロレス」ということで発表させていただいた。初めての学会という場においての発表であり、幾多の至らぬ点があった。その中で、力道山時代の大衆文化から、現在のマニア文化への変化の上での若者文化との比較などとしたほうがよいというご指摘をいただいた。

また、現在プロレス団体も45団体存在するが、プロレスを専業として生活できているのは、一握りのレスラーだけである。小さな団体では、営業社員やレスラーに給料やファイトマネーが出ていなかったり、遅配されてたりするのが現状である。給料が出なくて「プロレスの仕事にかかわってみたい」、「リングに上がってみたい」等の、いわゆる“プロレス好き”によって小さな団体は支えられている。それには無理があり、団体を存続させてゆくのにいずれ限界がくる。最近では、4月9日に試合中、頭部を強打したダメージにより急性硬膜下血腫で、女子プロレスラーが死亡している。また、第8回学会大会と同じ会場である広島アステールプラザ大会で、一昨年にも同様の試合中のダメージによる死亡事故も起きている。そこで、レスラーの健康管理、保障問題、道場を持っていないこと、エスカレートしてゆく大技等の問題点を見直していくかなければならない。

今回はプロレスというショービジネスをとらえる上で、視野が狭かった点が反省して残った。今後、プロレスの現状での問題点やその時代の文化と結びつけながら研究を進めてゆきたい。最後に、たいへん貴重なコメントを下さった先生方どうもありがとうございました。

## 理事会報告

### 第5期 第5回理事会報告

日時：1999年3月26日（於 広島アステールプラザ 4F 小会議室）

参加理事：井上俊（会長）、宮内孝知（理事長）、江刺正吾、平野秀秋、森川貞夫、亀山佳明、杉本厚夫、山口泰雄、山下高行、リー・トンプソン、菊幸一、小椋博、松田恵示（オブザーバー；事務局幹事）

[注：今回の理事会は実際には新旧合同で開催されたが、本報告では便宜上、各理事会の参加理事を分けて報告する]

議題：総会議案について

1. 報告事項
  - a. 理事長報告（宮内理事長より）  
第5期理事選挙の結果が報告された。
  - b. 編集委員会報告（平野委員長より）  
「スポーツ社会学研究第7巻」の発刊の経緯、決算等について報告された。
  - c. 研究委員会報告（森川委員長より）  
日本体育学会との共催シンポジウムにおける内容と人選について報告があった。
  - d. 國際交流委員会報告（小椋理事より）  
2002年のサッカーW杯に関する共同研究の打診がイギリス・グラスゴー大学からあり、来日中の関係者と会合をもつたこと、今後山下理事が中心となって会報等を通じて参加者を募集したい旨、報告があった。
  - e. 事務局報告（江刺事務局長、菊理事より）  
新入会員の承認及び会員の動静について報告があった。平成10年度新入会員は、16名（内学生会員5名）であり、全会員数は293名（学生会含、1999.3.10現在）である。また、日本学術会議の団体登録に関する事務は、手続き事務の完了まで菊理事が引き続き担当することになった。
  - f. その他  
ホームページのサイトは、引き続き杉本会員（京都教育大学）にお願いすることになった。
2. 審議事項
  - a. 平成10年度事業報告・決算案について  
決算案の支出の内訳に基づき事業内容が報告され、決算については監査報告代理の山下理事より監査結果が報告され、これを承認した。
  - b. 平成11年度事業計画・予算案について  
予算案の支出の内訳に基づき事業計画が報告され、予算の内容を含めて承認された。

c. 次期理事の承認について  
選挙結果に基づき、以下の16名（会長推薦3名を含む）を理事として承認した。

（五十音順）

荒井貞光、池井望、伊藤公雄、井上俊、江刺正吾、亀山佳明、小谷寛二、小椋博、佐伯聰夫、清水諭、中島信博、野川春夫、松村和則、森川貞夫、山口泰雄、リー・トンプソン

d. 次期会長の推薦について

井上俊会員を次期会長に推薦することとした。

e. その他

- ・総会議長を東川会員（広島大学）にお願いすることとした。
- ・選挙人について、これまで慣例に従い学生会員も含めてきたが、今後は規約通り正会員のみによる選挙にするのかどうかの意見が出され、継続審議とすることになった。

#### 第5期 第1回理事会報告

日時：1999年3月26日（於 広島アステールプラザ 4F 小会議室）  
参加理事：荒井貞光、池井望、伊藤公雄、井上俊、江刺正吾、亀山佳明、小谷寛二、小椋博、清水諭、中島信博、野川春夫、松村和則、森川貞夫、山口泰雄、リー・トンプソン、生沼芳弘（オブザーバー；次期学会大会世話人）、松田恵示（オブザーバー；事務局幹事）

議題：第5期理事会の役割担当について

a. 審議の結果、以下のような役割分担及び委員長を選出した。

- 会長…井上俊
- 理事長…森川貞夫
- 事務局…小椋博（局長）、小谷寛二  
(事務局を香川大学に置き、幹事を野崎武司、松田恵示両会員にお願いする)
- 編集委員会…佐伯聰夫（委員長）、荒井貞光、松村和則、清水諭、野川春夫
- 研究委員会…亀山佳明（委員長）、江刺正吾、伊藤公雄、中島信博、池井 望
- 国際交流委員会…山口泰雄（委員長）、リー・トンプソン、野川春夫
- ホームページ委員会…（非理事）杉本厚夫
- 監事…中島豊雄、西垣完彦

b. 次期大会開催地について

第5期理事会での審議通り、関東圏で行うことを承認した。また、世話人である生沼会員（東海大学）より、実行委員長を平野会員（法政大学）とし、東京・上智大学において2000年3月26日（日）-27日（月）の2日間の日程で開催を予定している旨、発言があり、これを了承した。

## 新理事長挨拶

時代の変わり目に負けない学会の基盤づくりを

森川貞夫（日本体育大学）

1999年から2000年へ、さらに新しい21世紀へという時代の変わり目にこうした役を引き受けたことになった光栄をうれしく思います。とはいえた活動に切れ目はなく、これまで順調に発展してきた学会活動のさらなる発展のために努力していかなければという気持ちだけは今後も大事にしていきたいと思います。幸いにして井上会長が今期も引き継ぎ会長職をおられますので日本学術会議への申請登録など学会内外の活動に拍車がかかるものと期待しています。

今のところ特に新しい抱負といえるようなものはありませんが、10年を一区切りにして考え、より確かな学会の基盤を作るためにも日本スポーツ社会学会設立10周年を文字どおり会員がこぞって祝福できるような事業を準備したいと思います。そのためには会長を中心に他の理事の方々、各委員会とも連携を深め、いっそう会員のみなさんの要望あるいは声を反映できるように努めたいと思います。よろしくお願いします。

## 旧理事長挨拶

宮内孝知（早稲田大学）

晴天の霹靂とも言うべき状況で理事長を引き受けてから2期4年が過ぎました。学会創立、基盤づくりに奔走されたI、II期の理事会に比すると、小生が理事長であったIII、IV期理事会は、「若い」理事会でした。組織の確立と発展を期待されていたと思わずにはいられませんでしたが、小生の無能さ、怠慢さ故に、十分な責務を果たせず退任することを申し訳なく、かつ残念に思っております。

しかしながら、池井前会長、井上会長のもとでの4年間は、小生にとって多くのことを学ばせていただきました。また、各理事には本当に世話をなりました。前理事会が仮に「大過」なく終われたとするならば、それはひとえに各理事、事務局のお陰であります。

小生としては、任期中の活動として、学会誌の市販化、国際シンポジウムの開催、韓国国際会議への参加などが、特に印象深く記憶に残ります。これらのこととも、全くもって皆様の支えによるものでした。

会長、各理事、そして会員の皆様に改めて御礼申し上げます。「何もしなかった、できなかった理事長」でも、今は何となくホットしております。本当にありがとうございました。

## 研究委員会からのお知らせ

### 新研究委員長挨拶

春よ、もう一度

亀山佳明（龍谷大学）

春もたけなわというのに、いつまでも肌寒い日が続いているが、会員の皆様方に  
おかれましてはご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、この度、研究委員長役のご指名を受けましてここにご挨拶申し上げます。当学会にとりまして、研究の内容やその水準を維持、発展させることが研究委員の役割とこころえておりますので、これは大役と思わずにはいられません。他の委員の皆様と協議を重ねながら、また、会員の皆様のご意見を伺ながら、少しでもお役に立てれば幸いと存じております。どうか、皆様のご協力のほどをお願い申し上げます。

ところで、当学会が1991年に発足してまもなく十年になろうとしています。十年ということは当学会にとりましても新たな段階を迎えるということです。学会としての存在意義が問われる段階に達したということです。われわれはその責任を自覚しなければならなくなつたと思います。研究の部門におきましても、そうした確証を残していく義務があるのではないでしょうか。そこでわれわれとしましては次のような方針を立ててみたいと考えました。

まず第一に、学会の研究の内容とその水準を確かなものにするために、あらためてこれまでの動向をふりかえってみる必要があること。言い換えると、十年のあいだにわれわれは何をなしとげたのか、そのアイデンティティを自らに問いかけることです。過去の学会誌や学会大会のプログラムを繰ってみると、その答えが見えてくるわけですが、その作業を行つてみることが必要があると思われます。

第二に、いま一度、発足当時の問題意識に立ち返って、学会としての研究内容の充実を図つていきたいということです。たとえば、学会大会のメインのシンポジウムは当初のやり方と現在のそれとは随分異なつてきております。当初は研究部と当事校との協力のもとで、その内容を決めてきましたが、現在ではほとんど当事校の方にまかせっきりになっています。こうした現在の在り方をもう一度見直してはいかがかと思います。学会としての研究方向を長期的に展望しながら、研究委員と当事校とが協議を重ねながら課題研究のシンポジウムを立ち上げていくことができないでしょうか。

第三に、これも研究内容の充実にかかわりますが、学会の一般発表の充実を呼びかけたいと存じます。といいますのも、他の学会の例にもれず、当学会も一般発表の場が若い研究者（院生）によって占められています。それはそれでよいことだと思われますが、中堅、ベテランの研究者の発表があまりにも少ないのでないかと危ぶまれます。当初の大会ではこうした方々の参加、発表が多くみられたと記憶しています。三つの世代ががっぷりと組み合わさってこそ学会としての活気が生まれようというものです。現在考へているアイデア、これから予定している研究テーマ、それらを遠慮なく学会の場において発表していただいて、自由に議論できる場にしてみないと存じます。

以上の提案を一言で申し述べるなら、「手作りの学会を！」ということです。皆様方

の積極的なご協力を願い申し上げます。

### 旧研究委員長挨拶

心残りの研究委員長退任の辞

森川貞夫（日本体育大学）

2年前に研究委員長を引き受けた当初は、かなりの仕事ができるものと意気込んでいたのですが、終わってみれば大したことないなあというのが実感です。しかし一応の「方針」（？）とアンケート結果などを参考にしてどうにかここまでやって来たのですが、終わるに当たって心残りの点について今後の学会の研究活動のために心残りの点について今後の学会の研究活動のために記録しておきたいと思います。

学会が常に時代の要求に見合った「つかさねのできる研究活動」のスタイルを確立していくためにはどうしても学会大会時のシンポジウムの他に「宿題研究」「課題研究」みたいなセッションを設けていく必要があるように思います。問題は会員の多くが合意できるようなテーマなり課題なりをどうやって提起していくかにあるように思いますので新しい委員会でも是非検討を続けてほしいと思います。その意味で会報第18号に掲載された「総括」と「提案」についても今日の時点で見直していただけたらといさか心残りの辞を述べて会員のみなさまにご協力のお礼を申し上げ退任の挨拶とします。

## 編集委員会からのお知らせ

### 新編集委員長挨拶

「スポーツ・スタディズは面白い」を期して

佐伯聰夫（筑波大学）

皆さん今日は。この度、私は理事会より「スポーツ社会学研究」の平成11年12年度編集委員長を委嘱されました。任務の重さを荒井貞光、野川春夫、松村和則、清水諭、黄順姫、中江桂子の編集委員各氏と分かれ合つて、楽しく仕事を進めたいと思っております。どうぞ宜しくお願ひいたします。

私どもの足元では、大学改革の急速な展開の中で、アカデミズムのテリトリーが激しく揺さぶられ、学問と研究の枠組み存在根拠が厳しく問われております。まさしく「越境」の時代に入っていると言えるようです。新参者のスポーツ社会学にとって、この状況は厳しいものではありますが、また活性化の貴重なチャンスでもあります。是非、世紀の変わり目のこの2年間に、「スポーツ・スタディズは面白い」を期して、越境風で挑戦的な多様な論文を掲載したいと考えております。どうぞ、どしどしご投稿ください。

こんな意味も含めて、新編集委員会ではスポーツ社会学研究に「特集テーマ」を設定し、3本程度の依頼論文を掲載することにいたしました。本年度は、前編集委員長平野秀秋会員（法政大学）の責任担当による「スポーツの20世紀」を予定しております。

どうぞご期待ください。

編集業務のスケジュールは基本的に例年通りです。下記に従って、是非ご投稿ください。沢山の面白い論文をお待ちしております。

## attention!!

論文投稿先：305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1  
筑波大学体育科学系 スポーツ社会学研究編集委員会(佐伯聰夫研究室気付)  
原稿〆切日：平成11年8月31日  
投稿 要領：スポーツ社会学研究7号92-93頁参照

### 編集委員長挨拶

平野秀秋（法政大学）

今年3月末まで編集委員会事務局をお預かりしました。その間『スポーツ社会学研究』の第4巻～第7巻の4巻を刊行しました。退任にあたり、いろいろ皆様にお礼やお詫びがあるだろうとの事務局の温かいお心遣いから（多分）、「会報」に投稿する機会をいたしました。

ますなによりも、この期間にご投稿いただいた会員の方々、査読等に当たっていただいた会員の方々、熱心にお読みいただいた会員の方々、などの皆様に厚くお礼申し上げます。

さらに市販への移行にともない、図書館の逐刊蔵書や講義の資料として大量にお買い上げいただいたりご推薦いただいたりしたことにも、心からお礼申し上げます。なおこの件に関しては、研究誌の知名度向上と学会財政への貢献のために、今後ますますご尽力いただきたく存じます。どうぞ会員各位の所属大学等で逐刊蔵書に加えられているか力いただきたく存じます。どうぞ会員各位の所属大学等で逐刊蔵書に加えられているか力いただきたい存じます。どうぞ会員各位の所属大学等で逐刊蔵書に加えられているか力いただきたい存じます。どうか、いま一度お確かめいただければ幸いです（こればかり言ってすみません）。

上記の4巻の中で、編集委員会事務取扱たる私の不手際からお名前や書誌情報に脱落、誤植などがありました。その都度お詫びと訂正をさせていただきましたが、もう一度襟を正してお詫びを申し上げます。

次に、折角の機会ですので「学術情報センター」（学情）から昨10年12月に当学会宛てに到着した「オンラインジャーナル編集・出版システム開発・構築プロジェクトについて」という文書について、簡単に会員各位にご報告します。なお、システムの流れ図付き説明書は広島大会の際に理事会に提出し、若干のコメントとともに報告しました。

現在、編集委員会事務局は次のような業務を行います。

- 1) 会員各位からの様々な投稿を郵送でいただく、2) 原稿を受け取ったお返事を発送する、3) 査読を行うために編集委員会で査読専門委員をお決めいただき、その決定に従って委員各位に該当する原稿を発送する、4) 査読の結果を書類にして編集委員会に報告し次のステップをお決めいただく、5) 最終的に掲載が決定した段階で投稿された会員に「掲載決定」の証明書を郵送する、6) 全原稿を発売元である法大出版局に郵送し割付をお願いして印刷所にまわす、7) 返送された校正刷りを該当会員に郵送する、8) 著者校が終わったものを返送し再校を取る、9) 再校の著者校とのつきあわせ、全体の表記統一などを行う、10) 大会開催校と連絡し配本体制を取る、11) 投稿会員からの「抜き刷り」希望を印刷所に届ける（何だか書いていてもくらくらしますが、これも会員各位への情報公開ですのでお許し下さい）。

「学情」からの連絡は、この内の「学会とりわけ編集委員会の決定」にかかわらない部分を代行するシステムを開発するので、テストに参加してほしいという要請です。

もっとかみくだいていえば次の3点になります。  
a) 上記の業務のうち、原稿・通知・証明書などの郵送の業務をオンライン化し、決定にもとづいて「学情」が代行できるようなシステムを作る。  
b) 確定した原稿はオンライン文書としてもデータベース化する（もちろん学会が必要と決定すれば紙への印刷物にもできる）。  
c) 「学情」サイトに公開されたデータベースの管理や料金徴収も「学情」が行えるようにする。  
以上のテストを開始する。

なおもっと詳しい情報を必要とする会員は次のURLにアクセスしてご覧下さい：  
<http://www.nacsis.ac.jp/els/detail-j.html>

私見を一語にすれば、きわめて有意義なシステムであり、いずれかの段階でテストおよび本番への当学会としての参加可否を検討すべきもの、ということです。ただしその可否や時期は、当然すでに業務を引き継がれた今期あるいはそれ以後の編集委員会と理事会の検討を経て大会の決定による、ということになります。

原稿を「紙への印字状態」で提出することも一応は可、ということになっていますが、このシステムは会員が「オンラインで」投稿することを最終ゴールとしていることは自明です。「オンライン投稿～オンライン刊行」が最終イメージです。

昨年度は私の判断でこのシステム開発テストへの参加を見送りました。理由は、連絡が届いた時期が年度末で編集委員会の検討に付す余裕がなかった、ということに尽きます。現在当学会はFDDによる投稿が完全に定着し、その意味でオンライン投稿への準備は整ったとはいえ、次のオンライン投稿・オンライン査読・オンライン校正などへ移行するには会員全員の体制整備を計るために数年はかけて進めた方が混乱が少ないと、とも感じたことは事実です。もちろん私の感想でしたが。

ただし、誤解の無いように付け加えます。オンライン化への対応では、当学会は最先端とは申しませんが、決して他より遅れているわけではありません。当学会のように研究誌の英文アブストラクトがオンラインで読める学会は、まだ少ないのが現状です。

この体制の最終イメージを大略把握するためには、次のURLをぜひ早い機会にご覧いただきたいと考えます：<http://www.nacsis.ac.jp/els/contents-j.html>

## SHORTENED CURRICULUM VITAE

以上、重要なので説明が長くなりました。いずれにせよ、どのくらいのタイムスパンかは別として、さまざまな学会がこれに参加すると予想します。ぜひこの機会に「学情」の取り組みについて関心をお持ち下さることを、最後にお願いします。

### 国際研究委員会からのお知らせ

#### 2002年日韓共催W杯サッカー共同研究の案内

小椋 博（香川大学）

グラスゴー大学ヨーロッパ日本研究センターのHerbert. Moorhouse 助教授（社会学）が2002年日韓共催W杯サッカーに向けて、日本および韓国研究者の参加を視野に入れた共同研究の申し込みが当学会にあり、関心のある会員は積極的にご参加ください。

1 日本側共同研究事務局  
山下高行会員（立命館大学）にお願いしてありますので、関心のある会員はそちらと連絡を取ってください。

2 Moorhouse 氏の紹介および共同研究のアウトライン  
別添資料（英文）

3 今後の予定  
Moorhouse 氏はできれば今年6-7月に来日を希望されており、それが可能であればいすれかの場所で研究の具体案の検討会をもつ。

4 その他  
・広島での学会大会時にこの共同研究プロジェクトを紹介したところ、すでに6-7人の会員が参加の意志を山下会員に伝えている。  
・前期の事務局であった奈良女子大学には、韓国の研究者からも共同研究の申し出があり、参加が見込まれる。  
・韓国体育学会では数年前から日韓共催W杯に関する国際シンポジウムを開催しており、日本体育学会からも代表が参加している。韓国体育学会では、2002年のこのシンポジウムを日本で開催することを希望しているという情報もあり、多方面に発展する可能性もある。

#### NAME

Herbert Frederick MOORHOUSE

#### QUALIFICATIONS:

B.A. First Class Honours, University of Leicester (1965)

M.Sc. (Econ.), London School of Economics (1970)

#### POST:

Senior Lecturer in Sociology, University of Glasgow

#### ADDRESS:

Research Unit in Football Studies  
Department of Sociology  
University of Glasgow  
Glasgow G12 8RT  
Scotland

#### TELEPHONE:

#### FAX:

#### E-MAIL:

#### WORK ON FOOTBALL:

I have developed a wide study of Scottish professional football. Since there are important structural differences between football in England and Scotland, it is not surprising that theories erected around English evidence to account for, say, football hooliganism, or the place of football in male working class culture, 'identities', nationalism, football finance, etc. simply do not fit the Scottish case. I have produced a series of papers which explore the connections - historical and contemporary - between nationalist and ethnic feelings in Scotland and professional football, including aspects of 'soccer violence'.

Recently I have become much more involved in the examination of economic aspects of the sport in Scotland and England and Europe, and their relationship to the development of the European Union.

We want to make contacts with interested scholars in the host countries. We would hope to learn from the research of academics in Japan and Korea, and we would like an opportunity to put our ideas before them.

The initial focus of the European group was on the issues of football 'hooliganism' and violence around football, but the focus has steadily expanded.

The group's main recent project was to carry out surveys of the crowd at many of the biggest football clubs around Europe, material which provides a base-line of standardised information about those who go to watch football in various European countries.

Generally, a whole range of topics are now being researched including:

- football 'hooliganism';
- the relation between youth cultures and football;
- nationalism, racism, ethnic and regional rivalries and football;
- national, regional, and personal identities and football;
- the political economy of the football industry;
- the 'commercialisation' of European football - the effects of merchandising, sponsorship, advertising, television coverage, re-built stadia and so on for the traditional ties between clubs and fans;
- football and the law;
- football as employment - studies of players as workers, and of the training and development schemes for young footballers in various countries.

Such a listing by no means exhausts the topics of European discussions, but it does suggest the main themes which are being widely debated.

H.F.Moorhouse  
22<sup>nd</sup>. February 1999

## 事務局からのお知らせ

### 新事務局長挨拶

-手作りの学会とは何か-

小椋 博 (香川大学)

香川大学、吳大学、岡山大学の、魚がおいしい「備讃瀬戸」地域が新たに事務局を引き受けるに当たって、もう一回「手作りの学会」という日本スポーツ社会学会の原点に返って学会活動を盛り上げていきたいと考えています。古くから瀬戸内海は人と物の交流の場であっただけでなく、何よりも情報の伝達ルートがありました。備讃瀬戸のこの地理的、歴史文化的遺産を継承して、新事務局は学会内の情報の交流を今まで以上に活発にすべく、配慮したいと考えています。

具体的には年3回発行される「会報」を活用して、これまで掲載されてきたニュース以外にも、関連する新刊案内の充実、会員の動向(たとえばメディアにおける会員諸氏のちょっとした発言や掲載記事の紹介、また海外研修や留学報告など)、さらには地域ごとの研究会活動の紹介など、いろいろあろうかと思われます。会報の発行はこれまで担当してきた岡山大・松田幹事に加えて、新たに吳大の小谷理事にも参加してもらって、体制を強化します。皆様方からの様々なニュースや情報の提供をお願いします。

会員の移動、経理の管理、年2回開かれる理事会と学会時の総会準備などについては、主として香川大学の小椋と野崎さん、それに日体大・森川理事長の研究室におられる依田さん、これらのスタッフでこなしてゆく予定です。

さて、手作りの学会とは何を意味するのでしょうか。まず金がない、従って皆さんのが自発的参加(ボランタリズム)で学会がなり立つと言うことが一つあろうかと思います。金がないだけに、つきまとう権威もあまりないと私は思っています。自由さがこの学会の本領だと開き直ることができるでしょう。さらに手作りには、ある種のいかがわしさがつきまとうかもしれません。「何でもあり」の世界と言っても良いと思います。この「何でもあり」と言うことは、広島・学会大会でのスポーツ社会学教育を考えるセッションで、東元さんがスポーツ社会学の授業を説明するのに使った言葉です。この言葉も参考にこれから事務局運営をやっていきたいと考えています。

この春まで事務局を引き受けていただいた奈良女子大学をはじめとするスタッフの方々は、期間は2年と短かったものの、本当によく仕事をやってくださったと今改めて感謝しております。特に新住所録の整備と学術団体への登録、それから学会事務局の煩雑な仕事のマニュアル化など、これから引き受ける我々には大きな遺産を残していただいたと思います。

日本スポーツ社会学会も発足10年を迎え、また新しい、あるいはリ・ニューアルしたアイデアでこれから10年をスタートする時、事務局をお預かりする我々もこの新しい試みに何らかの寄与ができるればと、密かに願っております。皆様方の積極的な御参加・御協力をお願いします。

## 事務局長挨拶

江刺 正吾（奈良女子大学）

この度、事務局が奈良女子大学から香川大学に移り、正直なところホットしているところです。2年前に、諸事情から、緊急避難的に九州大学から引き継ぎましたが、心の準備ができていなかつこともありまして戸惑ってしまいました。しかし、学会の総会で決定したことですので、皆さんの協力を得ながら学会のスムースな運営に努め、できればさらなる発展のために微力を尽くすべく覚悟を決め、その黒子的な役割を担ってきました。

幸いにも、事務局の煩雑な仕事を若くて有能な会員に、分担してお願いすることができました。学会事務局の中心となる庶務と会計の仕事を菊幸一さんに、『日本スポーツ社会学会会報』の編集を松田恵示さんに担当してもらい、そして事務補助を本学の院生にお願いしました。事務局のこれらの仕事を快く引き受け、そしてベストを尽くして戴いたこの方に、事務局長としてお礼を申し上げたいと思います。

ところで、事務局をあずかった立場から若干のコメントを、順不同で述べますと以下の通りです。

○事務局は、学会を構成する全会員の知的な利益に寄与するという前提から、会員とのコンタクトが重要と考えていました。その一環として、関心領域や電子メールなども含む会員名簿を1999年2月に作成しました。大いにご活用いただければ幸いです。

○学会の中核機関である理事会の裏方の仕事も、事務局の大切な役割です。理事会を開催する会場の確保、案内状の発送、議案の整理、審議内容の文書化などです。全国に在住している会長や理事長はじめ各理事に連絡することは、けっこうエネルギーを使うものです。通信手段としては、電話・ファックス・Eメールなどの文明の機器はあるのですが、多忙な社会を反映してか、通信相手に直接的なコンタクトをとるのが難しいのです。

○『会報』は、年に3回発行し、必要な情報を会員に流しているのですが、この編集作業も大変です。予定された原稿が期日どおりに届くか、印刷を依頼した業者がきちんと仕事をしてくれるか、予算は大丈夫か、そして約束している期日までに『会報』を会員のもとに発送できるか等々です。

○学会は、会員が納める会費で運営されていますが、会員の把握と会費納入に関しても気を使います。「暖簾に腕押し」といった寂しさを味わうこともあります。

以上が2年間の事務局をあずかった者の感想の一部です。ともあれ、今後の学会の発展を祈って、最後の挨拶とさせていただきます。

## 総会報告

第8回日本スポーツ社会学会総会報告

1999年3月26日 於 広島アステールプラザ

進行（宮内理事長）

1. 会長あいさつ（井上会長）
2. 議長選出…東川安雄会員（広島大学）
3. 議事

### (1) 報告事項

- a. 理事会報告  
宮内理事長より理事会で承認された事項が報告された。
- b. 編集委員会報告  
とくに、将来的には編集業務の電子化を促進したいこと、出版不況の折から学会誌の売れ行きが芳しくないので会員に販路拡大の協力をお願いしたい旨、報告があった。
- c. 研究委員会報告  
理事会と同様の報告がなされた。日本体育学会における共催シンポジウムの人選は以下の通りである（報告の後、決定された人選を含む）。  
■賭けとスポーツ（コーディネーター：亀山佳明）  
司会…井上俊  
演者…亀山佳明、小椋博、黒須充

■地域とスポーツ活動（コーディネーター：柳沢和雄、日本体育・スポーツ経営学会、会報で既報の「仲澤真」氏は誤り）  
司会…山口泰雄  
演者…中島信博

■子どもの心とからだの発達と社会的反映  
演者…山本清洋

- d. 事務局報告  
事務局長より会報について、種々ミスが重なったことについてのお詫びがあった。  
会員等の状況について、理事会と同様な報告が行われた。
- e. その他  
国際交流委員会、ホームページ委員会より、理事会と同様の報告があった。

### (2) 審議事項

- a. 平成10年度事業および決算報告（別紙資料1参照）  
事務局担当菊理事より説明の後、監査報告代理の山下理事より監査結

- 果が報告され、これを承認した。
- b. 平成 11 年度事業計画および予算案について  
事務局担当菊理事より説明の後、これを承認した。
- c. 次期（第5期）の役員選出について  
理事会での原案通り、これを承認した。
- e. 平成 11 年度第 9 回学会大会の開催地および時期について  
生沼会員より理事会で同様の報告があり、これを了承した。

4. 閉会

## 新入会員

氏名	住所	TEL	FAX	所属		
E-mail				Tel / FAX		
クラシマアキラ 倉島哲				京都大学大学院	ニシムラクミコ 西村久美子	神戸大学大学院
クラシゲカヨ 倉重加代				鹿児島女子短期大学	ヤマダリキヤ 山田力也	福岡大学
イトウケイゾウ 伊藤恵造				日本体育大学大学院	オオクマセツコ 大隈節子	九州大学研究生
ナカザワカズナリ 中澤一成				東海大学	シミズカズミ 清水一巳	福岡大学大学院
コダマカツヤ 児玉克哉				三重大学	ウルシハラミツノリ 漆原光徳	四国学院大学
					タバタノリヨシ 田端教恵	東海大学大学院
					シゲムラアツシ 重村敦司	東海大学大学院
					ダテヨシミ 伊達由美	四天王寺国際仏教大学

ウエダシンジ  
植田真司

ミズノ(株)研究開発部

谷口勇一

福岡市体育協会

ムラカミコウシ  
村上幸史

大阪大学大学院

廣瀬涼子

ニイロアキヒロ  
新納昭洋

岡山大学大学院

稻田俊治

ツジイズミ  
辻泉

東京都立大学大学院

「日本スポーツ社会学会会員名簿」追加記載

ウシキソキチロウ  
牛木素吉郎

兵庫大学経済情報学部

チバナオキ  
千葉直樹(p.12)

マツイヨシアキ  
松井良明

奈良工業高等専門学校

フルヤマサトシ  
古屋正俊(p.18)

ショウジセツコ  
庄司節子

市邨学園短期大学

「日本スポーツ社会学会会員名簿」訂正

※先日配布いたしました「日本スポーツ社会学会会員名簿」に誤りがございました。  
ここに深くお詫びして訂正いたします。

菊幸一(p.6)  
野崎武司(p.15)

深澤宏(p.17)

赤堀方哉

梅光女学院大学短期大学部

# 編集後記

お待たせいたしました。スポーツ社会学会報第23号をお届けします。今号より事務局が奈良女子大学から香川大学に移転し、気持ちを新たに編集作業に取りかかりました。

特に、今回より編集作業に岡山大学の院生2名(浦田八千代、小坂美保)が加わり、新しい風を学会誌に吹き込んでくれると思います。しかし、まだまだ編集作業に慣れなため、ミスも多いことと思いますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

事務局の分担は以下の通りです。

日本スポーツ社会学会会報 第23号

平成11年6月30日発行  
日本スポーツ社会学会事務局  
(香川大学教育学部内)

◎学会への連絡、および入退会、住所・所属変更、会費納入、その他の各種手続きに関しては、以下までお願いいたします。

日本スポーツ社会学会事務局  
〒760-8521 香川県高松市幸町1-1 香川大学教育学部  
事務局長・会計担当 小椋 博

庶務担当 野崎武司

(この4月より事務局移転しました。前任の奈良女子大学、菊先生よりたいへん丁寧な資料整備などの引継処理をしていただきました。ここに感謝の意を表明させていただきます)

◎会報への投稿に関しては以下までお願いします。

〒700-8530 岡山市津島中3-1-1 岡山大学教育学部  
会報担当 松田恵示

◎なお上記以外に、小谷寛二理事(吳大学)と依田充代会員(日本体育大学短期大学)が事務局とともに活動いたします。

# 入会申し込み書

(※事務局へご返送願います)

ふりがな	会員種別 (どちらかを○印で囲む)
氏名:	正会員・学生会員
紹介者:	専攻分野・関心領域(キーワード2つまで)
(推薦人) ※必ず明記してください	
勤務(所属)先:	
勤務(所属)先住所:〒	
TEL ( )	FAX ( )
連絡先住所:〒	
TEL ( )	FAX ( )
E-mail:	

井上俊・亀山佳明編

# スポーツ文化を学ぶ人のために

日本スポーツ社会学会編

文化として、様々な形で人々と深くかかわるスポーツ。その関係を読み解く視点をわかりやすく提示し、スポーツ文化研究の基礎を築く文献

## 変容する現代社会とスポーツ

経済、文化のグローバリゼーションの中でスポーツの意味が再び問われ始めた。世界の研究者が京都会議で熱く語ったスポーツの行方とは

1500円

## 新版 現代文化を学ぶ人のために

杉本厚夫編

## スポーツファンの社会学

1893円

## サッカー狂の社会学

1893円

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファンション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

「観ている」のか「魅せられている」のか、それとも「見られている」のか――  
スポーツファンの視線からスポーツ文化を読み解いた注目作

ジヤネット・リーグラー 亀山佳明・西山けい子訳

伊藤公雄・牟田和恵編

## ジェンダーで学ぶ社会学

1800円

「生まれる」から「死ぬ」までの身近なできごとを問い合わせ、そこにひそむ「性差」の圧力を浮き彫りにする、ユニークな社会学のテキスト

山田昇・江刺正吾編

## 女性と社会

女性エンパワメントを求めて

男女共生を求め育んできた社会の動きや文化的要素を時代・地域を超えて多面的に探る総合的研究

2200円

黄順姫

## 日本のエリート高校

2800円

学校文化と同窓会の社会史

名門高校はいかにしてエリートを生み出してきたか。その身体文化の形成・変革・継承を捉える

杉本厚夫

## スポーツ文化の変容

1893円  
多様化と画一化的文化秩序

現代社会における文化装置としてのスポーツが発信する様々なメッセージを多様な視点から読む

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 ☎075(721)6506  
<http://www.sekaishissha.co.jp> <消費税別>

近刊

## 大修館書店

〒101-8466 東京都千代田区神田錦町3-24 電話03-3294-2221代  
価格は税別です。

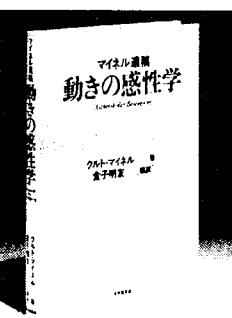
## 図説 スポーツの歴史

編垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正著  
人間にとつてスポーツとは何か。歴史的視点からその「現在」と「世界性」を問う。オールカラー  
A4変型判・5664頁 本体18,000円



## 図説 マイネル遺稿 動きの感性学

クラト・マイネル著 金子明友編訳  
動きの感性教育の重要性と必要性を説いた遺稿を、生誕百年を記念して運動学の第一人者が世界に先駆けて邦訳。



## テニスの源流を求めて

表 益宏編著  
謎の多いテニスの源流解明に光をあてた、関係者待望の書/未だ不明なテニスの起源と源流を解明した基本的な外國文献7篇を初邦訳。「日本への伝来」も加えて集大成。  
A5判・4600頁 本体4,200円



## 現代スポーツ批判

P·C·マッキントッシュ著  
寺島善一・岡尾恵市・森川貢大編訳  
A5判・2004頁 本体1,740円

大野 兼著  
四六判・2004頁 本体1,600円

## 日本のスポート環境批判

中村敏雄著  
A5判・2000頁 本体1,600円

スポーツの時代をどうつくるか  
中村敏雄・出原泰明・等々力賛治著  
四六判・3000頁 本体1,900円

## スポーツ産業論

松田義幸著  
A5判・1000頁 本体21,300円

## 民族遊戯大事典

大林太良・岸野雄三・寒川恒夫・山下晋司編集  
文化人類学・スポーツ人類学の新進・ベテラン執筆陣95名で、楽しい事典。  
菊判・800頁 本体9,800円



## スポーツ社会学講義

森川貢大・佐伯聰大著  
寺島善一・岡尾恵市・森川貢大編訳  
A5判・2000頁 本体1,900円

P·C·マッキントッシュ著  
寺島善一・岡尾恵市・森川貢大編訳  
A5判・2004頁 本体1,740円

现代社会とスポーツ